

牧里先生との思い出

大阪人間科学大学人間科学部 石川 久仁子

1. はじめに

今回、関西学院大学大学院でご指導いただき、かつ大阪府立大学社会福祉学部時代の教え子であるからだろうか、Human Welfareにて牧里先生との思い出について執筆する機会を得た。公的機関で、民間の福祉現場で、また大学教育の場で活躍している牧里ゼミ出身の卒業生は数多く存在する。質実剛健でバランスのよい学生の中で、個性派である私が語る牧里先生との思い出には偏りがあるだろうし、多少記憶違いがあるかもしれないが、そういった断りを入れたうえで、書き進めたい。

2. 荒れたゼミ初日

私が在籍した1990年前後の大阪府立大学社会福祉学部では、地域福祉論と地域福祉計画論を牧里先生が、コミュニティワークは定藤丈弘先生が、社会福祉運営論を右田紀久恵先生が担当していた。地域福祉を学ぶ者にとっては最高の環境であったように思う。

社会福祉演習、いわゆるゼミについては2年生、3年生、4年生の3段階方式であった。2年生は福祉入門編、3年生ゼミからが本格的スタートだった。2年生の冬、どのゼミにするのか、掲示板の前で思案していた。もともと児童福祉やメンタルヘルスに関心があったが、2年たち入学時の福祉のイメージと現実の福祉現場との異なりも理解し始めていた。しかし、勉学というよりも、所属していた公害問題研究会の活動や、ゴルフ場問題やリサイクル運動をめぐる市民運動に熱中していた。勉学でのこだわりは特になかった。

当時牧里ゼミは、毎年、現場に関わる調査活動をおこなっていた。

「牧里ゼミって調査するんだって」

「へえ～」

牧里先生は、どうも大らかな先生の方である。調査への関心と先生の人柄で牧里ゼミを希望した。希望者は10名だった。

3年生の4月、初めてのゼミは荒れた。牧里先生から、今年度のゼミの活動として、聖隷ニッセイ福祉財団から委託をうけた中高年女性の高齢者介護の意識調査を実施することを告げられた。当時、聖隷ニッセイ福祉財団は厚生省の提唱する「ふるさと21健康長寿のまちづくり」事業(WAC)に基づき、奈良県中部に総合型の高齢者施設を展開しようとしていた。福岡県中間市における「ふるさと21健康長寿のまちづくり」事業に関する本を渡された。私はちんぷんかんぷんで、素朴に「こんなんあるんやな」と思っていたが、いきなり隣でひとりのゼミ生が吠えた。

「先生は、企業の開発の片棒を担ぐんですか。ゼミでこんな調査をすることは間違っています」

正確に覚えてないが、こんな内容だったように思う。ゼミが一気に凍りついた。

社会福祉学部の1学年の人数は60人弱、入学時より自主合宿や学祭などで学生同士の交流は深く、互いに性格を概ね把握している。「でたっ」と皆内心想っただろう。正直なところ私も彼女と似たような感想を私ももっていたが、このままでは進まない。

「でも、お金だしてくれるところがあって調査ができるんだったら、出してもらってもいいんじゃないの」

と発言した。彼女は不満そうな顔をしたような気がするが、あとは淡々と話しが進んだ。この時の様子

を牧里先生は詳細に覚えていた。10年以上だった後、

「他のメンバーは何かいいそうだったけど黙っていた。君の発言でほっとしてたよね」

しかし、私が覚えているのはこの時の牧里先生の表情だ。さぞかしびっくりされたか、困っているのかと思いきや、とても興味深そうに、楽しそうに微笑んでいた。この表情は講義の際にも時折みられた。ジレンマ的な場面だ。AはBであるべきなのだが、Cだったりする。困った話なのだが、こんな話をするとき先生は楽しそうなのだ。

3. 調査ゼミ牧里研究室

先輩から伝え聞いていたとおり牧里ゼミは調査ゼミであった。1983年から1990年にかけては美原町社会福祉協議会と協働し、各種の調査を実施している。特に1983年に実施した「美原町ボランティアニード調査」は社会福祉学部1期生から3期生まで合計37名による大がかりな調査であった。牧里ゼミを中心に、定藤ゼミや牧里先生が顧問をつとめていたボランティアサークルや手話・点字サークルのメンバーも調査員として加わった。夏休みに実施されたこの調査は美原町の自治会館に泊まり込んで実施された。

もともとは美原町社会福祉協議会の職員からボランティアセンターの活動について相談されたことからじまったという。『ボランティア活動への関心と必要についての調査』（大阪府社会福祉協議会1982）によると、調査対象となった自治体で「ボランティアに頼みたいことをもっている」人は1割程度であるが、実数からすれば無視できる数ではなく、福祉対象者の生活実態にそくしたニーズの実態に迫ろうとする調査であった。学生は「ねたきり老人パート」「聴覚障害者パート」「肢体不自由者パート」「視覚障害児者パート」「精神薄弱児者パート」に分かれ、それぞれ20人前後の協力者、合計105人に対して聞き取り調査を実施している。1984年以降は、「ひとり暮らし高齢者」「ねたきり老人介護者家族」「婦人の社会参加」とテーマを変えながら、当時、地域福祉研究において、大きなテーマであった在宅福祉を取り上げながらも、当事者が、家族が、住民がそれぞれ、どのように生活し、関わりあい、生活文化、地域文化をつくっていくのか、いけるのかについて検討している。その成果の一部は、1985～86年に発刊された『地域福祉講座』第5巻在宅福祉の展開、第6巻組織化活動の方法に反映されている。

さて、8期生である私の代が3年生ゼミで実施することになった中高年女性の高齢者の介護意識調査は翌年実施される大規模調査に向けてのパイロット・スタディであった。調査項目を分担・検討し、アンケート票を輪転機で刷りあげ、牧里先生より紹介いただいた協力者の自宅を訪問していった。私が訪問したのは、協力団体であった豊中市子供文庫関係者だった。大量の本棚がある個人宅に近所の子どもたちがごんごん遊びにくる地域実践の現場風景が印象深く記憶にのこっている。他、それぞれの自宅、大きな家、薄暗い家、様々な家族関係、担当した調査協力者数は限定されたものだったが、「様々な家、暮らしがあるものだな」と感じた。

翌年、奈良県河合町・上牧町での本調査に取り組んだ。2つの町内に暮らす40歳以上65歳未満の女性2000人が対象、留め置き法で実施した。研究生、後輩、他のゼミ生の協力をえて、総勢27名で実施された。私の担当地区は大規模団地だった。調査票を抱えて、いけどもいけども、呼び鈴に応じる住民は少ない。平日の団地にはこんなにも人がいないものなのかと、途方に暮れた。友達同士で、不審そうにでてきた住民に対し、どのように接すれば気持ちよく回答してもらえるのか、不在の住民にどのようにアプローチするのかについて知恵を出し合った。

美原町における調査にしろ、豊中市、河合町、上牧町における調査にしろ、調査対象者の自宅に訪問し、お話をうかがったり、団地を駆けぐる経験は卒業生たちにとって、ゼミの最大の思い出であり、学びだった。私は実査によって調査活動の面白さを実感し、更に興味をもった。別の卒業生にとっては、学生時代の調査活動がソーシャルワーカーとしての訪問・アウトリーチ活動の原点になった。

牧里先生の意図としても、「学生にとっても実際に自宅に訪問してリアルな生活実態を把握することが

大切」という観点から実施されていたとのことである。現場に接し、現場から学ぶ、という姿勢が学生教育の中にも表れている。

しかしながら、これだけの調査でありながら、先生の関わりを多く思いだすことができない。というのは、調査の仕切りやとりまとめを、同級生や研究生が主に担っていた事による。また、そもそも先生の細かい指導がなくとも、同級生、後輩たちはタスクをテキパキとこなした。4年間で培われたチームワークも背景にあった。

これは牧里ゼミに全体的にいえることである。還暦祝いの際に、教え子たちに届けられた先生の似顔絵入りのTシャツに同封されていた手紙の一節に「僕が育てたというよりも、皆が勝手に育っていったように思います」といった趣旨の文章が書かれていた。一種の放牧主義であろうか。

困ることもあったが、社会福祉学部内のつながりは深く、先輩たちがよく後輩たちの面倒をみてくれた。他のゼミの先生もあれこれ目にかけてくれた。特に里見賢治先生と定藤丈弘先生は牧里ゼミの学生と縁が深くご指導、アドバイスをしてくださったように思う。定藤先生は公務員の福祉職志望の学生会の自主勉強会のサポートを細やかにしてくださった。常に傍らにいた定藤邦子さんも学生たちを気遣ってくださった。牧里ゼミには、各学年のリーダー格の学生が常におり、先生が不在でも社会福祉学部の学生ネットワークの中心に位置していた。

4. 「それはネットワーキングだよ」～卒論・進路指導

先生が何も指導していないように思えるのだが、何もしていないというわけでもない。やはり、ゼミの先生の真価は卒論・進路指導である。私が、大学4年間、最も打ち込んだことは、公害問題研究会での活動と市民運動だった。「法律による社会福祉」に物足りなさを感じる一方、社会問題に苦しんでいる人はこんなにもいるじゃないか、難民の人たちへの支援は、関西に移住し水俣病で苦しんでいる未認定患者への支援は社会福祉研究の範疇にはいらないのかという不満もあった。

他の学生は、手話サークルや点訳サークルなど福祉系サークルで活動していた。私は1年生の頃より環境問題に関する市民活動団体に複数出入りしていたのだが、既存団体の手伝いがつまらなくなっていた。3年生の秋頃から高校時代の後輩と一緒に「すいた・川を考える会」という市民団体を名乗り、吹田市内に流れる3~4kmの小河川の源流から下流を歩くウォーキングイベントを5回ほど企画、吹田市報やタウン誌などで呼びかけ実施した。その成果をもとに絵地図「正雀川マップ」を作成、「身近な自然環境を考えるツール」として1部100円で販売していた。当時市民活動をおこなう女子大学生は珍しく、タウン誌・新聞などで取り上げられる機会をえた。「こんな福祉に関係のない活動する学生は先生からみたら奇妙なのだろうな」と思っていた。すると、ある日タウン誌に紹介された記事の切り抜きが牧里研究室の壁に貼られていることに気づいた。うれしかった。

卒業論文についても、福祉分野とは直接まったく関係のない、新たな市民活動のあり方について書きたいと牧里先生に熱弁をふるってみた。「何わけわからないこといつているの」と思われるのだろうかと思っていたが、楽しそうに聞いていた牧里先生はひとこと

「君がいつているのはね、“ネットワーキング”というものなんだよ」

「は？それは、なんですか」

後日渡されたメモに2冊の書名が書かれていた。J. リックナップ+J. スタンプス著の『ネットワーキング』（プレジデント社）と播磨靖夫著の『知縁社会のネットワーキング』（柏書房）だった。

牧里先生は細やかに指導するタイプではないが、要所要所でアドバイス、助け船をだしてくれる。社会福祉学部資料室の司書の方も協力してくださり、「ネットワーキング研究会」という市民活動家・研究者による研究会がトヨタ財団の支援をうけながら活動していることがわかった。資料室には、各種の貴重な研究報告書、パンフレット、各団体のニュースレターなどが整理され保管されていたが、この資料たちは

教員・学生と司書との共同作業で構築されていたのではない。資料室は比較的最近まで府大関係者以外にも公開されており、関西学院大学をはじめ関西一円の社会福祉研究者・院生らの研究に大きく貢献したことは間違いがない。

牧里先生には卒論作成にあたってインタビューすることを勧められた。当時、大阪ボランティア協会事務局長であった早瀬昇さんを紹介いただいた。多忙の中お時間をいただき、同じく市民活動を卒論のテーマにしていた友人とともにお話をうかがった。そして、帰りにファイルを1冊渡された。ネットワーキング研究会についての資料を綴じた私的ファイルであった。「こんな大切なものを一学生に貸すってどういうことなのだろう」と早瀬さんの行動に驚愕した。そして、資料を読む中で行かなければならない場所に気づく。『知縁社会のネットワーキング』の著者である播磨靖夫さんが理事長を務めるたんぼぼの家だった。

5. 「播磨さんに育ててもらったら？」～卒業論文からのネットワーキング

「女が結婚しても仕事を続けることは難しいのよ。仕事を続けるために、公務員か先生になりなさい」

幼い頃から、専業主婦の母から懇々といわれていた。大阪府立大学社会福祉学部学生の主な進路は公務員だった。しかし、4年生の時にうけた公務員試験にことごとく落ちてしまう。最後の、そして第一志望の自治体は2次試験で不合格だった。牧里ゼミでの一場面が頭によぎる。

「皆1次試験うかったな。よしよし。次は2次面接だね。うん。でも、君は心配だな」

え、私の何が心配なのだろうかと思った。当時は意味がわからなかった。

ともかく、なんやかんやで卒論を書きあげた。タイトルは「現代におけるネットワーキングの意義とその構造分析」である。口頭試問では副査である定藤丈弘先生に、開口一番「君の卒論はネタ本がないね」といわれた。お褒めいただいたのだろうか。たんぼぼの家のインタビューに対応いただいたのはネットワーキング社会研究所の主任研究員の増子大介さんだった。彼の説明はつまりNPOセクター論だった。ネットワーキングが行きつくところはNPOという形態の組織とこれを応援する中間支援組織を日本の社会にいかにつくりあげるのかということなのか、というのが私の当時の理解だ。卒業論文にもNPO法人という形態が必要だという一文をいれた。1992年1月であるので牧里ゼミ生でNPOを最初に取り上げたのは私だろう。上田惇生と田代正美の翻訳によるP・F・ドラッカーの『非営利組織の経営－原理と実践』がダイヤモンド社から出版されたのが1991年7月、NPO論の幕開けだ。

卒業論文は書き上げたものの、就職が決まっていなかった。公務員以外に進路を想定していなかった。環境問題関連の市民運動でお世話になっていた山田國廣さんが1990年に大阪大学工学部を退職し、「循環科学研究室」を立ち上げていた。山田先生は滋賀県環境生活協同組合設立にも大きく関わった環境運動の名オーガナイザーであった。新しく立ち上げた研究室の事務員に誘ってくださった。しかし、これから環境運動の事業化がどこまで進むだろうか。そして、自分の専門性が環境分野に通用するのであろうか。私が大学で学んできたのは社会福祉学であった。

人生どこでどうなるかわからない。卒業間近の3月卒業論文のコピーをもってたんぼぼの家に協力のお礼にいくと、そこにクールなオーラを放つ1人の女性がいた。当時、東京都老人総合研究所の研究員であった須田木綿子先生だった。須田先生はたんぼぼの家がおこなっていた研究プロジェクトの協力者でたまたま奈良に来ていた。卒業論文に興味を示され、バラバラと呼んだ須田先生は

「よく書けているわ。才能あるわよ」

といった。初対面の人に正面切ってお褒めいただいたのはこれが初めてだった。学生は褒めて育てるべきである。しかし、この何気ない一言が人生を大きく変えることになる。その隣に、財団法人たんぼぼの家の理事長である播磨靖夫さんが座っていた。数日後、増子さんから電話がかかってきた。

「たんぼぼの家で働きませんか」

当時、市民活動団体で働くということはワーキングプアを意味した。しかも、大阪からは遠いので奈良で一人暮らしをすることが前提だった。給与の金額をきき、実習に使用した生活保護手帳をめくった。しかし、市民活動団体スタッフは、私のあこがれだった。公務員になるのか、市民活動で食べるのか。こんな時こそ、ゼミの先生に相談である。

多忙な牧里先生に梅田のナビオの地下の喫茶店で相談した。ひと通り私の話を聞いた牧里先生は、深く考える様子もなく

「播磨さんに育ててもらったら？」

といった。同級生たちの多くが地方自治体の福祉職につく中で、いまでいうところの NPO 職員という訳のわからない職に飛び込んだ。時は 1992 年 5 月、バブルがはじける 1 年前だった。

6. 大学院への進学その 1～関西学院大学との出会い

学部卒業時に大学院への進学をまったく考えなかったわけではない。なにげなく「先生、大学院にも関心があります」といつてみた。「僕、来年はアメリカだよ」翌年 7 月からカルフォルニア大学パークレー校に Visiting scholar という立場で渡航することが決まっていた。

財団法人たんぼぼの家では 6 年間働いた。当初は卒論のテーマでもあった NPO に関する研究会の事務局が主たる仕事であった。日本における NPO 法制定運動のいわば決起集会となった第 2 回日本ネットワーク会議において、10 の市民活動団体のケーススタディを発表させていただく機会も得た。この際に、調査研究と発表の基本についてご指導いただいたのも須田木綿子先生だった。牧里先生に指導上怒られたことはなかったが、須田先生は厳しかった。しかし、同時に、東京都老人総合研究所の机を 3 日間用意し、真横で手とり足とり、研究の基本を叩きこんでくださった。この際、東京都老人総合研究所の他の研究員には私は牧里先生の教え子ということで紹介された。牧里先生が東京都老人総合研究所に出向されていたことを初めて知った。

次年度からは障害をもつ人の芸術文化活動の実態調査やこれらの活動を促進するフォーラム・ネットワーク組織の形成など各種プロジェクトが中心となった。大阪での展覧会には牧里先生も立ち寄ってくれたように記憶している。ABLE ART MOVEMENT と名付けられたこの取り組みは、私が退職後に大きく発展、障害者アートという一領域を築き上げ、関連団体だけでも年間億単位の事業規模となっている。

しかし、研究調査や研究会の事務局をしながら、自分自身が調査研究というものをちゃんと勉強していないことが悩みになっていた。3 年ほどたった頃、牧里先生に相談してみた。「もう、ちょっとたんぼぼの家でがんばってみたら」といわれた。暗い気持ちで社会福祉学部校舎の階段をおりた。

そもそも私は研究に向いているのだろうか。須田先生の言葉を思い出していた。

「きちんと研究したいのならば大学院にいきなさい。あなたが教えてくれれば、断る先生もいるかもしれないけれど、答えてくれる先生が必ずいるはずよ。ドアをたたきなさい」

我流で勉強はするものの、調査って本当はどうするのだろうか。たまたまある新聞記事が目に入った。関西学院大学社会学部における社会調査士養成に関する記事だ。現在、社会調査士とは社会調査協会の認定による民間資格であり、社会調査士科目を設置している大学において既定の科目を履修すれば取得することができる。しかし、全国の大学での認定は 2004 年からの取り組みであり、1990 年代の段階では関西学院大学や大阪大学などが先んじて独自にカリキュラムをつくり、認定をおこなっていた。記事を切り抜いた。

働きだして 6 年目の冬、夫の神戸への転勤が決まった。娘はまだ 2 歳、悩んだ末退職を決めた。そんな頃、夫が 2 つの資料をもって帰ってきた。関西学院大学社会学部オープンカレッジ“社会調査士コース”のパンフレットと神戸市の保育所案内だった。そして、ほぼ同じ頃、牧里先生が大阪府立大学から関西学院大学に移動するという話を伝え聞いた。

オープンカレッジは1年間の科目等履修のコースであった。現在の社会調査士認定に必要な科目数は6科目であるが、当時の関西学院大学社会調査士の認定に必要な単位数は40単位、20単位は統計・調査関連科目、残りは社会学の基礎的科目だった。論文の作成こそなかったものの、非常に充実した日々だった。最初は大規模私立大学の雰囲気や、社会学と社会福祉学の考え方の違いに戸惑ったが、高坂健次先生をはじめ、社会調査士担当の先生方は丁寧に指導してくれた。熱心な学生もいた。当時同じ授業をうけたメンバーに信州大学の岡本卓也さん、神戸学院大学の前田拓也さん、大手前大学の谷本要さんなどがいた。

前期が終わる頃、大学院への進学を検討し始めた。改めて牧里先生に連絡をとり、三宮のアジア料理の店で相談した。駅で待ち合わせしお会いすると、パッと神戸の店のガイドブックをだし、店を算段してくれた。やはり、こまやかだ。というよりも私が気がきかないのだろうか。大学院への進学を改めて相談した。「ふーん」という様子であった。推薦状を書いていただいた。あとは出願するだけだった。が、まもなく、第2子の妊娠に気づき、進学を断念した。

7. 大学院への進学その2 ～高田眞治先生との出会い

無事に第2子が生まれ、改めて大学院進学を再検討し始めた。通常ならば母校になるのであろうが、学生時代にお世話になった定藤丈弘先生は1年前に急死された。なによりも恩師の牧里先生は関西学院大学へ移動の予定であった。大阪府立大学牧里ゼミの先輩でもあり、関西学院大学大学院後期課程で学んだ瓦井昇さんに相談する。瓦井さんは「関西学院大学はいい大学だよ。師事するなら絶対に高田眞治先生がいいよ」といった。再び牧里先生に相談した。大学院進学に関しての3度目の相談だ。「僕は当分院生を持たないんだよ」と釘を刺しつつ、「指導教員はもちろん高田くんだろう」と断言した。

こんなにも指導が違うものなのだろうか。高田先生と牧里先生の指導はまったくタイプが異なるものだった。牧里先生が研究の方向性を左右するようなキーワードを提示し、インスピレーションを与えるのに対し、高田先生は研究計画をしっかりとて、基本的な概念をレビューすることや、研究の論理展開など、研究の土台作りをじっくりと指導された。常に研究の内容にじっくり耳を傾け、「あなたの研究は、本当にそれでよいのですか?」と無言で何度も問いかけた。当時、高田ゼミの前期課程・後期課程あわせて12人の院生が在籍、ゼミ生の発表とディスカッションは毎回刺激のかつ熾烈で、鍛えられた。

一方、関西学院大学で教鞭をとることになった牧里先生は3年間院生を指導されなかったが、院ゼミは開講された。牧里先生の論文などを取り上げおおらかにディスカッションする内容だった。2年間の前期課程をおえ、後期課程に進学したが、その年に社会学研究科に大きな出来事がおこる。文部科学省21世紀COEプログラムの採択だ。

8. COE プロジェクト「コミュニティワーク研究会」のリサーチアシスタントとして

2003年、関西学院大学大学院社会学研究科が文部科学省21世紀COEプログラムとして応募した“「人々の幸福に資する社会調査」の研究”が採択され、研究科および院生の日々はある意味でCOE一色に染まった。「文化的多様性の中の社会調査」「社会調査の実践的研究」「調査手法の革新」という3つの研究群のもと13つの研究プロジェクトが組織された。社会福祉学専攻では2つのプロジェクトが立ち上げられ、うち1つが牧里先生を代表とする「コミュニティワークに関する福祉社会学的研究」プロジェクトチームだった。このプロジェクトでは、牧里先生が府大時代から研究してきたコミュニティワークという方法を、「調査」という切り口から切り取ってみよう、それもコミュニティワーカーという専門的職業人がどのような調査をおこなっているのか、グループインタビューを通じて見出そうというものだった。研究の趣旨を中間報告書から一部抜粋してみよう。

コミュニティワーカーなる一群の職業人は、テキスト的には地域社会における福祉ニーズの把握と問題解決の資源の発見をめざす社会調査の活動から始まり、問題解決のためのプランづくり、住民参加と協働のネットワーク形成、そしてこれらの取り組みの評価と次なるステップへの課題提起・提案へ至るプロセスに従って住民に支援活動をするということになっている。いわばコミュニティワーカーの業務は、社会調査の活動と密接不可欠な職務遂行から成り立っているといえる。本研究は社会調査をふくみこんだ地域支援活動をしているコミュニティワーカーを社会調査する「入れ子構造」的な研究とも言えるだろう。

後期課程1年生だった私は半年間 COE プロジェクトのリサーチアシスタントとなった。コミュニティワーク研究をおこなう学外の研究者もふくめた研究会、そして関西圏を中心とした優れた地域福祉実践を支援しているコミュニティワーカーたちへのグループインタビューを主たる内容とするサブ研究会を実施した。著名なコミュニティワーカーへのグループインタビューを通じてコミュニティワーカーを規定する構成要素などについて検討をおこなった。

研究プロジェクトの推進はかつてのたんぼぼの家での仕事とは似て非なるものだった。市民活動団体で実施するミッションに基づきながら未知のステイクホルダーを掘り起こし、つながりながら新たな事業を立ち上げていこうとする調査研究プロジェクトと文部科学省の競争的資金のもと大学院研究科がおこなう調査研究プロジェクトの違いを理解したのは、1年半という短命の研究プロジェクトが終了し、しばらくたった頃だった。

2004年4月、牧里先生の大学院ゼミにも変化が訪れる。牧里先生が主に指導する前期課程の学生が入学した。梶原秀晃さん・川本健太郎さん・山田美智子さんだった。社会人院生が多かった中、ほぼ新卒の彼らの登場でゼミが若返った。COE プログラムもリサーチアシスタント制度が各プロジェクト付きではなくなるなど変化した。コミュニティワーク研究会も1年ほど継続したが、博士後期課程3年生の春、私は自分の出身地、そしてマップをつくった正雀川にほど近い大阪人間科学大学の専任助手に着任することになった。私は大学院研究科における牧里先生プロジェクトから遠のくことになる。

9. おわりに

私個人の研究テーマはコミュニティワークといえばコミュニティワークであるが、外国人集住地やかつての寄せ場など社会的に排除されやすい人々が多住する地域がフィールドだ。民族団体やエスニックアクショングループ、ホームレス支援団体など地域固有のニーズに基づいた組織による“コミュニティワーク”が主たるテーマであり、正直なところ市町村社会福祉協議会におけるコミュニティワークに関しての理解は大変浅かった。しかし、リサーチアシスタントを務めることにより、豊中市社会福祉協議会の勝部麗子さん、宇治市社会福祉協議会の岡野英一さんをはじめとした名ワーカーたちのお話を直接伺い、様々な学びをえることができた。論文化をしなかったことは後悔であるが、その後、地域福祉・コミュニティワークを担当する大学教員として、大変貴重な機会となった。

振り返ってみると、きめ細やかな指導をうけたわけではないが、要所要所で、サジェッションいただき、背中をおしていただいた。長い間、直接、牧里先生が関与しなくとも、牧里先生につらなる人脈、ネットワークのなかで育ち、助けられてきた。ありがたいと思う。20代で卒業論文、30代で修士論文、40代で博士論文をご指導いただき、口頭試問をうけた。「石川くんはこういうことをいいたいんじゃないの」と常に代弁いただいたような気もする。50も近づいてきているのだから、もうそろそろ自立したい。

卒業生のみならず、数多くの人達が、ゆるやかに、しかし時に力強く牧里先生に助けられてきた。人間らしい社会を求めての私たちのネットワークは終わらないのであろう。

参考文献

- 関西学院大学大学院社会学研究科（2004）『文部科学省 21 隻 COE プログラム「人類の幸福に資する社会調査」の研究
コミュニティワークに関する福祉社会学的研究 2003 年度中間報告書』
- 美原町ボランティア活動センター（1984）『ボランティアニード調査書』
- 右田紀久恵、小田兼三編（1985）『地域福祉講座 第5巻在宅福祉の展開』中央法規
- 右田紀久恵、牧里毎治編（1986）『地域福祉講座 第6巻組織化活動の方法』中央法規
- 財団法人ニッセイ聖隷健康福祉財団（1992）『中高年女性の高齢者福祉に関する意識調査報告書』